

『古代アメリカ』 5,2002,pp.23-48

## <研究ノート>

# 土器からみた古代マヤの洞窟利用 —ベリーズ、チエチェム・ハ洞窟遺跡を一例として—

石原玲子

(カリフォルニア大学リバーサイド分校人類学部大学院博士課程)

### 【キーワード】

洞窟遺跡、祭祀遺跡、土器、空間利用、シンボリズム

cave site, ceremonial site, pottery, spatial utilization, symbolism

---

## 1. はじめに

マヤ地域における数々の洞窟遺跡の存在は、西洋の研究者や探検者らの間で19世紀の終わり頃から知られていた。ただ、大々的に調査されるものは少なく、古代マヤ研究の中では洞窟遺跡は軽視されてきた。しかし、近年、洞窟を巡る民族学の成果と考古学の成果とを合わせた研究がなされるようになり、マヤ文化における洞窟の位置付けが明らかにされつつある。

本稿では、初めにマヤ文化の洞窟を巡る信仰を紹介し、マヤ考古学における洞窟考古学の現状と課題を述べた上で、筆者が1997年以来参加してきたチエチェム・ハ洞窟遺跡（ベリーズ、カヨ地区）の調査でみつかった遺物について考察する。最後に洞窟の中の空間利用について検討していく。

## 2. マヤ文化と洞窟

「全ての洞窟は神聖である」[1987: 127] とHeydenは、Eliade編著の『Encyclopedia of Religions』[1987] の中の「洞窟」という項目の下で述べている。統いて、洞窟は、以下のように定義されている [Heyden 1987: 127-133]:

いずれの文化においても、そしていずれの時代にも、洞窟は創造のシンボルである。洞窟は天体の創造の場所であり、民族や人が生まれ出たところである。天地創造の場所であり、生命の象徴でもあり、死の象徴でもある。洞窟は、均質な空間を遮る神聖な場所であり、宇宙空間の地点間を結び、例えば天から地へ、またその逆の地から天へ、さらに地から地下界へと通過することができるところである。[Eliade 1959: 37].

以上の定義はマヤ地域にある洞窟にもいえることである。民族学 [e.g., Christensen 2001, Cook 2000, Vogt 1981] や民族史学 [e.g., Tedlock 1996, Tozzer 1941] の成果によりマヤ文化のみならずメソアメリカのあらゆる文化において、洞窟は、宗教・世界観・日常生活などのあらゆる場面で重要な役割を果たしてきたことが明らかにされてきた。そういうたった洞窟に込められている複数の意味をここで簡潔に紹介する。

マヤの世界観によれば、世界は天空・大地・地下界の3層から成っており、洞窟はその地下界への入口とされている。地下界という場所は、恐れ多いところであり [Miller and Taube 1993: 177]、それを他界(otherworld)と呼んでいるFreidel等は地下界が暗黒の地であり、死の場所であり、苦悩が与えられる場所であるという [Freidel, Schele and Parker 1993: 151]。また、死を迎える時、魂が天空に辿り着くまでに地下界を通らなければならないという。地下界シバルバは、16世紀に書き残されたというキチ族の人々の間に伝わっていた神話『ポポル・ヴフ』に、英雄の双子が地下界の神々に球技の挑戦を挑み、死と直面する数多くの試練が立ち向かう場として出現する [Tedlock 1996]。

しかし、多くのマヤの人たちにとって日常生活の中で洞窟はもっと身近な存在である。地獄のような地下界への入口という見解とは相反して、洞窟は大地(earth)への入口でもある [e.g., Brady 2000, Brady and Ashmore 1999: 127]。大地はしばしば擬人化されて表現され、超自然的な力を持っている存在とみなされることは、マヤの人々に限らずアメリカ大陸の諸民族に共通している [c.f., Brady and Ashmore 1999: 126-127]。その理由のひとつとして、洞窟の中には、つまり大地の内には雨、風、雷、稲光等の神々が宿っており、農業を営む人々にとって重要である自然の諸現象が洞窟の中で創られていると考えられていた。従って、洞窟は、多産・生命・再生に大きく関連付けられる一方で、洞窟に宿る神々の怒りによって日照り・飢饉・病気が引き起こされることが恐れられ、奉納物が置かれたり、儀礼が行われたりした [c.f., Brady 1989: 41]。

さらに、すでに述べた雨などの諸現象のほか、人類が生まれた場所も洞窟とされている [c.f., Heyden 1975: 134]。と同時に、洞窟は祖先の魂が宿る場所でもあり、大地の内から、即ち洞窟で、人は生まれ、大地（洞窟）に人は帰るという概念が幅広く持たれている [c.f., Brady 1989: 53-54]。そのほか、マヤの人々の主食であるとうもろこしも洞窟に起源を持つとされている。とうもろこしの起源に関する神話は様々であるが、多くの場合は山や石の下に発見されたといわれ [Thompson 1970: 348-354]、落雷によって人間ととうもろこしに息吹が与えられたという [Taube 1986: 56]。

そのほかに、洞窟は図像学的な資料においても多く描かれている。オルメカのラ・ベンタ遺跡 (La Venta) における石碑の図像は、洞窟と王権の関係を表現しているという [Grove 1973]。Bensonによると、あらゆる図像学的資料で「洞窟」の中に座って描かれている人物は支配者や先祖であると主張し、そこに王権と神威が記されているという [Benson 1985: 183]。その背景には王位が大地や大地の神々から直接授けられたとみなされたのではないかという見解もある [Brady 1989: 55-64]。さらに、洞窟を意味する文字が地名に組み込められたり、絵文書にしばしば描かれていたりすることからも、メソアメリカの信仰の中での洞窟の重要性がうかがえる [Heyden 1975: 134]。

また、洞窟は都市計画を大きく左右する要素としても捉えられている。マヤの世界というものは、大地を挟んで「上に天空、下に地下界をもつ平たく四角い箱であり」 [Thompson 1970: 195]、東西南北の4点と中心点（もしくは天頂と天底点の2点の場合もある）をあわせた5点から成るとされている。中心点(軸)(axis mundi) からは、世界を構築している3層を行き来することができ、神々とコ

ミニケーションを図れるところである [Eliade 1959: 65; Heyden 1981: 12; Schele and Miller 1986: 42]。中心点は、最も神聖な場所であり、威厳ある場所、無尽蔵なる場所であるとされ [Eliade 1958: 379-382; 1969: 37-47; Heyden 1981: 12]、洞窟が中心点とみなされることがしばしばある。

建物の立地といった都市計画における洞窟の役割が考古学的に検討されたのは、グアテマラのドス・ピラス遺跡 (Dos Pilas) にてBradyが行った調査である [Brady 1997]。結論としては、民族的な資料が示唆するように、建築物が洞窟の真上、もしくは洞窟の入口の近くに建立されていることから、洞窟の存在を意識しながら都市の主要建造物等が建立されていたのではないかと提言された [Brady 1997: 614]。筆者が参加しているプロジェクトでも同様なことが認められ、ベリーズのローリング・クリーク・バレー地域 (Roaring Creek Valley) に位置するカハル・ウイツ・ナ遺跡 (Cahal Uitz Na) の立地は、周辺にある複数の洞窟の存在が大きく関わっているようである [Awe 1999]。さらに、カハル・ウイツ・ナ遺跡の主要建造物群と近くのアクトゥン・ナクベ (Actun Nak Beh) 洞窟遺跡はサクベによって繋がっており、都市計画を率いた者たちにとって洞窟が何らかの意義をもっていたことがうかがえる。こうして洞窟が都市遺跡と関連して報告されているものは幾例もあるが、その中でもテオティワカン遺跡 (Teotihuacán) [Heyden 1975, 1981; Manzanilla 2000] やチチエン・イツァー遺跡 (Chichén Itzá) [Carlson 1981: 179, Thompson 1938] などが代表的なものである。このように、新しい都市の誕生は世界の創造の繰り返しであり [Eliade 1979: 335]、新しい都市を世界に例え、そして都市計画をしている自分らを神々に例えることによって、世界を創造した神々を模倣したのではないかという見解がある [Heyden 1981: 6]。以上のように、洞窟はしばしば都市景観の中に組み入れられていることが確認され、都市に力と正統性を与えるもとになっていたと考えられている [Brady 1997: 615; Brady and Ashmore 1999: 139]。

こういった象徴的な意味を多く持ち備えた洞窟は、住居としては使用されず、もっぱら儀礼が行われた祭祀の場であることが近年認識されてきた [e.g. Brady 1989; Reents-Budet and MacLeod 1997; Awe ed. 1998]。洞窟が住居として適さない理由として挙げられるものは、洞窟の中が完全な暗闇であること、岩や川などによって洞窟の中での移動が危険であること、洞窟を長期使用するために必要な灯りや十分な灯りの燃料の搬入が困難であること、洞窟内の空調が悪いこと（つまり火を焚いても煙がこもってしまう）などがある。さらに、中米の洞窟の多くは奥行きが深く、自然光から全く遮られている空間（ダーク・ゾーンdark zone）が洞窟の大部分を占めることが多い（逆に、完全に自然光が当たる域（ライト・ゾーンlight zone）や自然光は少し入るが懐中電灯等の人工光も必要な域（トワイライト・ゾーンtwilightzone）は比較的少ない。）古代マヤの洞窟遺跡は、こういったダーク・ゾーンにて遺物がみつかることがほとんどであり、また、住居址に伴うようなゴミ捨て場なども報告されていないことから、古代マヤの人々にとって、洞窟の中で住居を構え生活をしていたという利用法は考え難い。

### 3. 洞窟考古学研究の現状と課題

マヤの洞窟遺跡における発掘調査は19世紀の終わりのMercerによるユカタン州北部にある多数の洞窟において行われた調査に遡る [Mercer 1897]。また、同じ頃にホンジュラスのコパン遺跡における洞窟遺跡が調査された [Gordon 1898]。

1920年代になって初めて大規模な調査が大英博物館によってベリーズのプシルハ（Pusilha）遺跡近郊の洞窟で行われたが、報告書によると洞窟遺跡から出土した土器は開地遺跡出土土器と全くの別枠で扱われた [Joyce 1929]。当時のマヤ考古学においては、土器が編年材料になり得ることが証明されたばかりであり [Vaillant 1927]、1950年代カーネギー協会（Carnegie Institution）によって行われたワシャクトゥン（Uaxactun）遺跡調査におけるSmith [1955] の土器研究の成果によって、土器に対する体系的な調査や分析手法が確実なものとなった。その成果は後の土器研究の基礎となった。この頃、マヤパン（Mayapan）遺跡の洞窟から出土した土器が開地遺跡から出土した土器と同じ方法・枠組みで分析された [Smith 1952, 1953, 1954, 1971; Strömsvik 1956]。

この時期から洞窟遺跡は住居址ではなく、祭祀遺跡だという見解が持たれるようになったが、まだ住居として使用されたという認識も根強かった。その現れとして、1960年代から1970年代にかけて、Pendergastによって洞窟遺跡の報告書がいくつか刊行されたが [Pendergast 1969, 1970, 1971, 1974]、洞窟遺跡の研究並びに洞窟遺跡における土器研究は、マヤ考古学の全体の流れからは疎外されていた。同様に、ユカタン半島にあるグルタ・デ・チャック洞窟遺跡（Gruta de Chac）[Andrews 1965] 及びバルカンカンチエ洞窟遺跡（Balankanche）[Andrews 1970] で調査が行われたが、それでもまだマヤ考古学界における洞窟考古学は希薄なものであった。

以後、洞窟遺跡に焦点を当てた調査・研究が増え始め、中には洞窟遺跡の土器を対象とした研究が見られるようになった。ベリーズのペトログリフ（Petroglyph）洞窟遺跡を取り上げたReentsによる研究は土器を主体としたものであり [Reents 1980]、洞窟遺跡が大々的に調査されたのはグアテマラのナフ・トゥニチ（Naj Tunich）洞窟遺跡を取り上げたBradyによる研究 [Brady 1989, Brady et al. 1998] がある。1980年代以後、最近20年間を経てようやく洞窟遺跡は住居址ではなく、祭祀遺跡として捉えられるようになってきた。

しかし、大きな問題点として、今までの洞窟遺跡の調査方法が体系的でなかったという点のほかに、洞窟遺跡出土遺物の大多数を占める土器に注視されてこなかったことも指摘できる。洞窟遺跡より出土した土器の研究は、マヤ考古学の土器研究の中でも軽視されてきたために、型式分類はおろか、洞窟内におかれたと考えられる土器の用途にも全く着眼されていない。従って、洞窟遺跡間の比較研究、洞窟遺跡と開地遺跡の比較研究が困難となっているのが現状である。そこで、本研究ではベリーズのチエチエム・ハ洞窟遺跡より出土している土器を中心に分析を行ない、洞窟が使用された時期を明らかにし、祭祀遺跡というコンテキストを踏まえた上で空間利用について考えたい。

#### 4. チエチエム・ハ洞窟遺跡

本稿で扱うベリーズのチエチエム・ハ洞窟遺跡（Actun Chechem Ha）は、グアテマラ国境付近のベリーズ西部、マカル川流域に位置する（図1）。近隣の開地遺跡には、ラス・ルイナス・アレナル（Las Ruinas Arenal）遺跡、シユナントゥニッチ（Xunantunich）遺跡、ネグロマン・ティピー（Negroman Tipu）遺跡がある。チエチエム・ハ洞窟は山中にあり、洞窟の入口に辿り着くには、ミルパを通り抜け、山の麓から急斜面なジャングルの山道を憚れない足だと20分ほど登る。入口は、大規模な鍾乳洞とは違って狭く、高さ1.5m、幅2.5mくらいである。

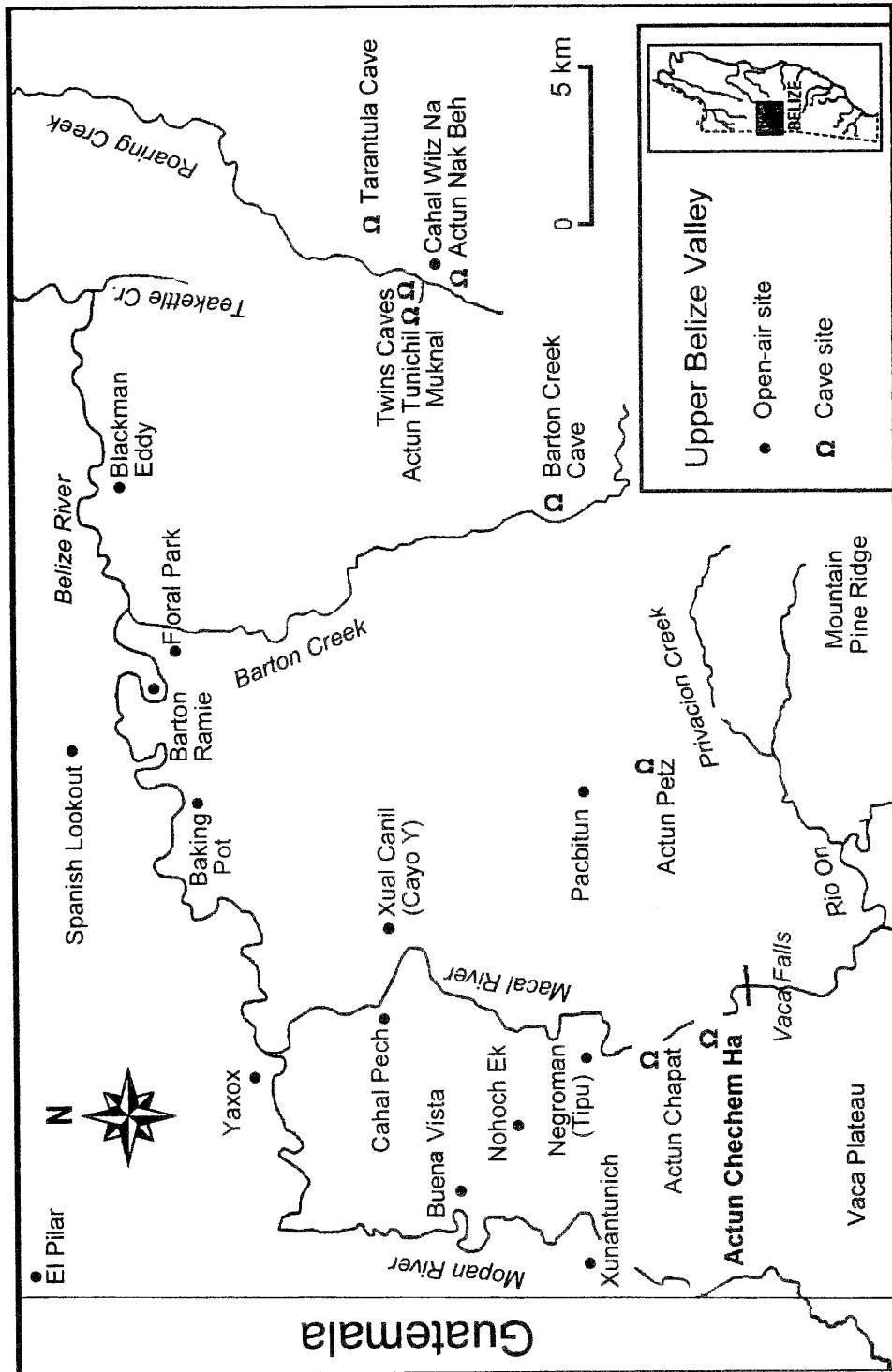


図1 ベリーズ西部地域研究洞窟プロジェクトによって調査された  
洞窟遺跡 (Awe 1998 一部改変)

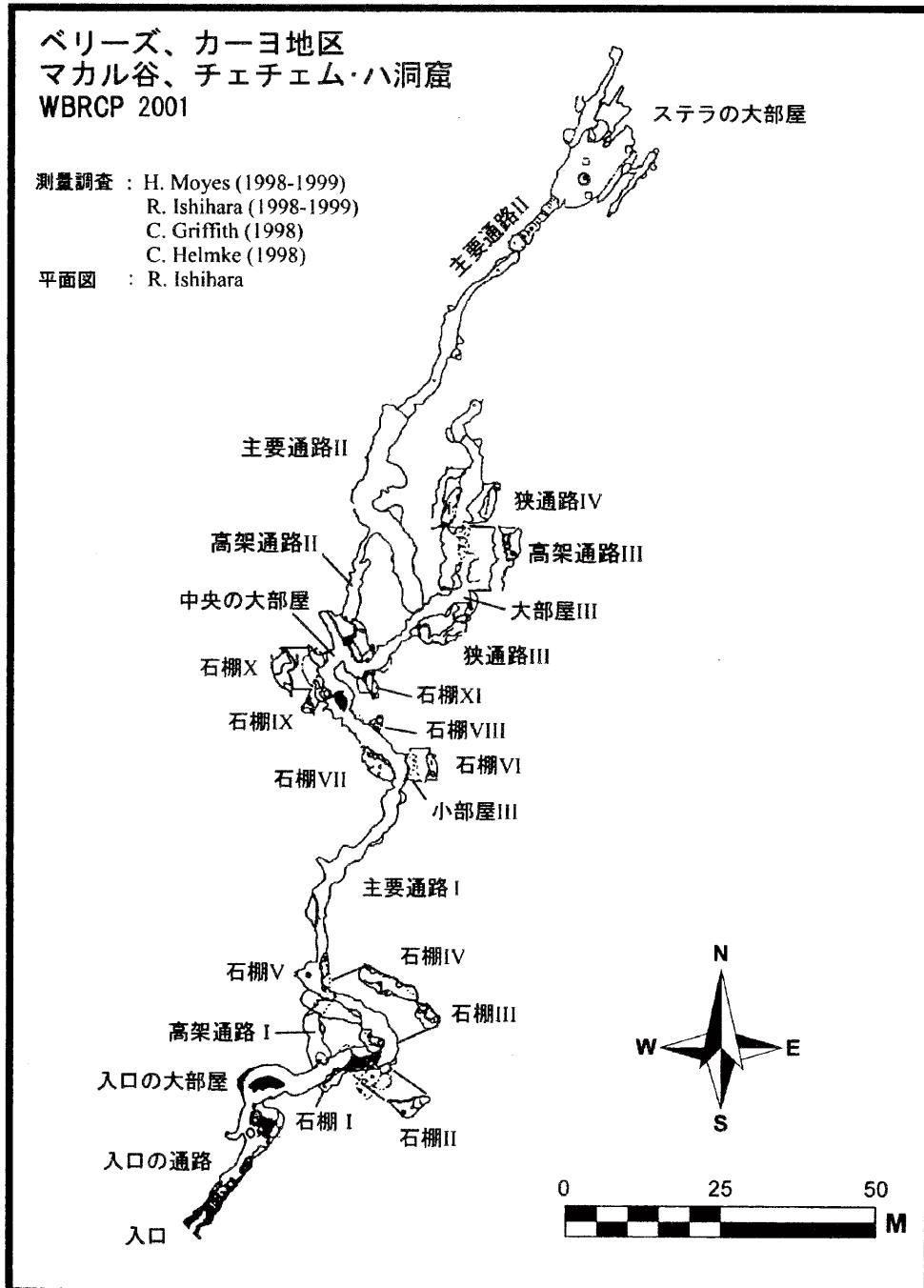


図2 チェチェム・ハ洞窟遺跡平面図

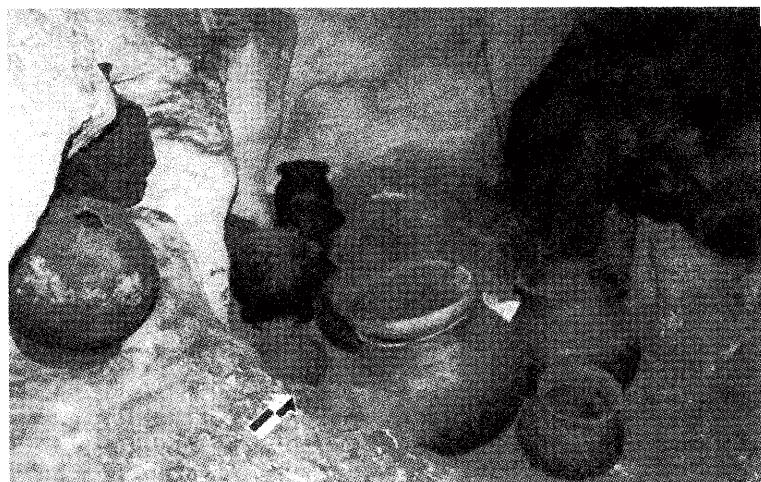


写真1 石棚 VII (後方のロープの6 m下が主要通路I)



写真2 高架通路I



**写真3 ステラの大部屋**

チエチェム・ハ洞窟は、1989年に地元の農家の人にによって発見されたといわれており [William Plytez 1999 personal communication]、ベリーズ政府の考古学省に報告された後、同省によって簡単な踏査が行われ、7点の多彩文土器（完形品）が政府に保管されることが決まった。それから、英国の洞窟専門家らによって、本遺跡の測量調査が1991年に行われた [Williams 1992]。ベリーズ西部地域研究洞窟プロジェクト（WBRCP）のチエチェム・ハ洞窟遺跡における考古学調査は、1997年の踏査を得て、1998年、1999年の夏に測量、発掘、表採などが行われた [Ishihara and Griffith n.d., Ishihara et al. in press]。

チエチェム・ハ洞窟（図2）は、全長約350mであり、ほぼ全長にわたる主要通路Iの他、数々の小部屋や石棚から成っている。遺物のほとんどは、主要通路沿いではなく、それより数メートル(2.2~6.8m)も上にある棚のような小部屋（石棚I~XI）（写真1）や通路（高架通路I、II、III）（写真2）から発見されている。こういったかなりの高さにある石棚にははしごなしでは登ることは困難である。

発掘は、ステラの大部屋（写真3）と入口の大部屋の2箇所のみで行われた [Ishihara and Griffith 2002]。前者では出土遺物はほとんど無に近く、後者においても少なかった。したがって、遺物の大部分は地表面にあったものであり、層位的なコンテクストがない。洞窟発見時からWBRCPの本格的調査が入るまで時間が空いているため、遺物の移動・紛失・盗掘の心配が考えられたが、調査以前に撮影されたスライドに写された遺物の配置と現況との比較などを行った結果ほとんど変わっていないことから、当プロジェクトによって記録された遺物の表採地点は古代マヤの人々が最後に残した原位置をとどめている可能性が高いということが確認された。

近年、古代マヤの洞窟遺跡はベリーズの観光業において重要な観光地として人気を上げてきたため、不必要に遺物を洞窟から取り出すことは控えられている。実測や写真撮影などのために一時に取り出すことはあっても、大抵の場合は洞窟の中で、通常屋内で行うような実測などを済ませることが多い。これは観光地であることとは別に、遺物の移動が洞窟の中では危険であったり困難で

あたりすることにも関わる。チエチェム・ハ洞窟遺跡も見学ツアーが訪れる観光地のひとつとされているため、遺物は取り出されずに発見当時のまま洞窟内に保管されている。当然盗掘の問題も考慮する必要があり、現地の人々の洞窟遺跡に対する考古学的な認識やツアーガイドのトレーニングやガイド免許取得を厳しくするなどして、政府側は様々な対策をとっている。

## 5. 方法

以上のような状況のもと、チエチェム・ハ洞窟内で土器の出土地点・器形・胎土・装飾など肉眼で観察できる属性を記録した。完形品はもちろん、口縁部や型式がわかるような特徴をもつ土器片、その他の土器片では20cm以上のものを対象に、1999年の夏にデータ収集を行った。同一の土器だとわかる土器片には同じ整理番号がつけられ、より正確な総数を目指した。結果、約360点の土器が分析され、本遺跡の遺物のほぼ全てが記録されたと思われる。チエチェム・ハ洞窟遺跡の土器は、既存の型式と比較して分類した（ベリーズ川流域のバートン・レイミー遺跡の出土土器をもとにした分類[Gifford 1976]やグアテマラ、ペテン州のセイバル遺跡、ワシャクトゥン遺跡の出土土器をもとにした分類[Sabloff 1975; Smith 1955]を参照した）。分類は、WBRCP団長Jaime Awe先生やマヤの土器に詳しい同スタッフのChristophe Helmkeの助言を受けながら行った [Ishihara et al. in press]。

## 6. 遺物の分析

チエチェム・ハ洞窟遺跡では、古代マヤの他の洞窟遺跡同様、遺物のほとんどが洞窟遺跡の特異な形成過程の結果、土に埋もれずに地表面に残されており、遺物や植物遺存体の保存状態が非常に良好である。また、本遺跡では土器の完形品が開地遺跡では例がみられないくらいに数が多く、すでに述べたとおり最後に使用された洞窟の状況がそのままで保存されているかのような良好なコンテクストであるといえる。

### 6-1. 土器

前述したように、本遺跡は層位が確認できない状態であるため、土器の編年は既存の型式分類に当てはめて行った（型式分類は主にGifford 1976を参照したため、時期区分はそれに従う）（図3）。ここでは、確認された土器を時期毎に掲示する（図4、表1）。

先古典期（前1000年-紀元300年）：この時代に該当する土器は、椀型のものが20点、甕型が49点である。後述するように先古典期の甕型土器の分類は確実なものではないためここでは甕型を除くと、先古典期の型式に該当する土器片は総数20点中入口の大部屋から9点が表採され、狭通路IIIから3点表採されている。この時代の土器には完形品はなかった。

古典期前期（紀元300年-600年）：この時期に相当する土器は、52点（椀や浅鉢が大半を占め、大皿1点、甕1点）である。この時代を代表するもので本遺跡にて意外にも数多く表採されたものは、ベザル・フランジ・ポリクローム（basal flange polychrome）と呼ばれる多彩文土器（型式名: Dos

主要時期	西暦	BARTON RAMIE (バートン・レイミー遺跡)
古 終末期	900	Spanish Lookout (スペニッシュ・ルックアウト 土器文化圏)
典 後期	600	Tiger Run (タイガー・ラン土器文化圏)
期 前期	300	Hermitage (ハーミティージ土器文化圏)
先 原古典期	紀元	Floral Park (フローラル・パーク)   Mount Hope (マウント・ ホープ土器文化圏)
古 後期	300	Barton Creek (バートン・クリーク土器文化圏)
典	600	Jenney Creek (ジェニー・クリーク土器文化圏)
期 中期	1000	

図3 本稿にて参照したマヤ地域における土器に基づいた時期区分  
(Gifford 1976: 46 図8より)

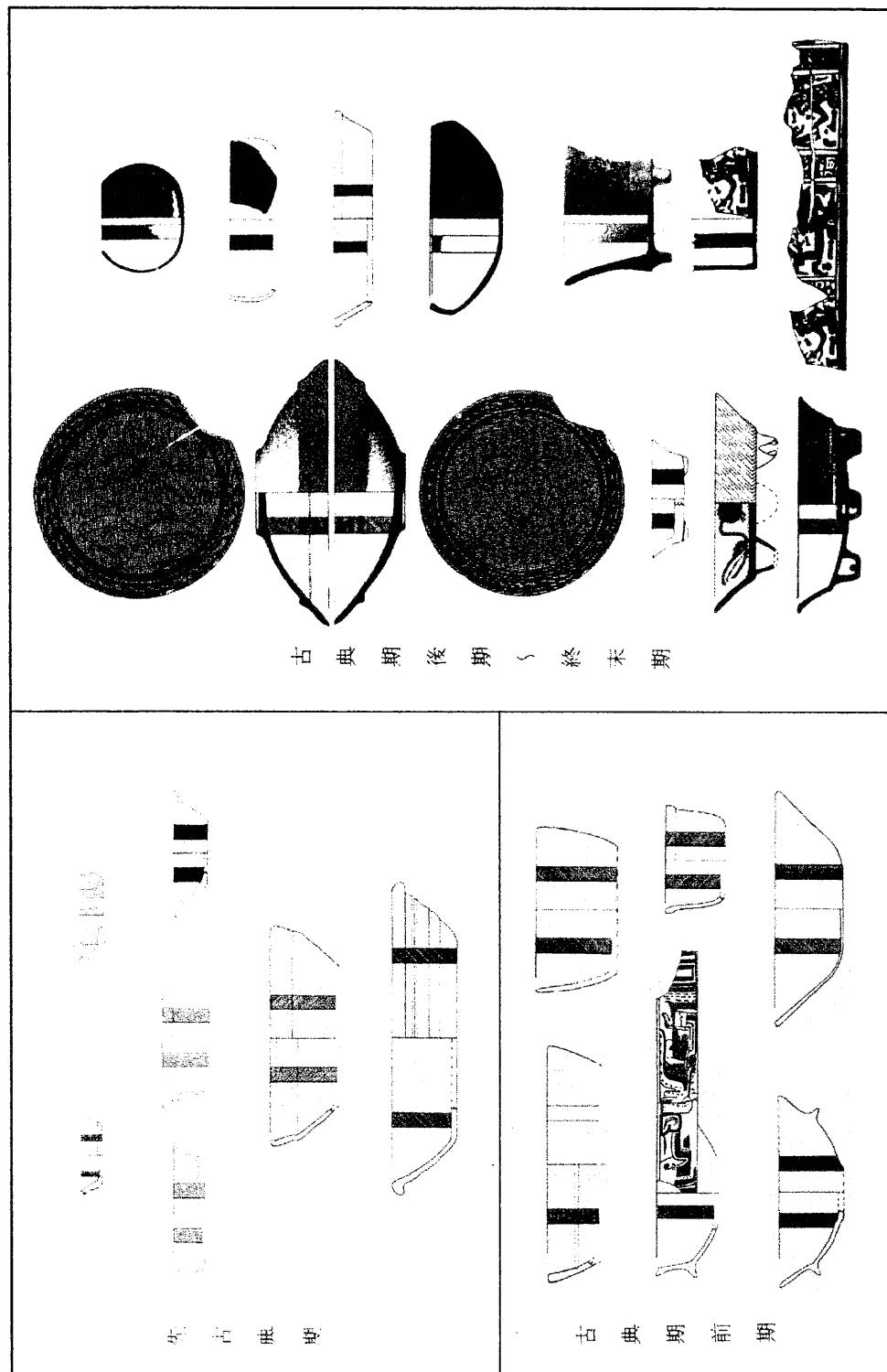


図4 チェチェム・ハ洞窟遺跡における彩文土器アセンブリッジ

Arroyos Orange Polychrome) である。この種の土器の器形は椀型であり、器壁の中央部の外面につけられる突起したフランジと呼ばれる部分の大きさ、突出の度合い、器壁につけられている位置によって時期差を示唆するといわれているが、実際に検証はなされてきていない。総数29点中9点が石棚Xより、そのほか11点が近くの中央の大部屋より表採された。つまり、29点中20点が洞窟の中心部に集中している。そして、前期の型式に分類された土器の総数52点中32点が洞窟中心部（中央の大部屋、石棚X）より表採されている。

古典期前期に該当すると思われる土器は、数量的に先古典期より少ないが、この時代のみ甕型土器があまりにも少ないので気にかかる。果たして古典期前期におけるこの洞窟での甕の使用がほとんどなかったのか。そのような結論を導く前に、ひとつ注意すべく点がある。問題は甕型の分類の欠如である。参照したいずれの分類も器形毎の分類がなされていないため、特に粗製土器である甕型土器の分類が確実でない。これは多くの土器研究が多彩文土器に焦点を当ててきた結果にすぎない。従って、先古典期の甕型土器と分類された49点と古典期前期の甕型土器と分類された1点は、確実にそれぞれの時代に値する正しい分類かは疑問が残る。これに関しては、層位が確認できる開地遺跡で得られるデータとの比較を通して、今後解決してゆかねばなるまい。

古典期後期(紀元600年-900年): チェチェム・ハ洞窟遺跡では、この時代の土器が大半を占める。先古典期や前期と比べて遺物が遺跡のあらゆる地点から表採されており、この洞窟での最後の活動が見られるのはこの時代であろうと考える。古典期後期は、Gifford [1976] の時期区分をもとにすると前葉(紀元600年-700年)と後葉(紀元700年-900年)に二分される。前葉に該当する土器は、少量であり椀型が9点、甕型28点（ほか甕型9点は前後葉に区別し難いもの）である。一方で、後葉に該当するものがほとんどであり、椀型24点、甕型95点、浅鉢39点、筒型土器3点、ミニチュア皿1点がある。前後葉の甕型土器は口唇部の形に微妙な特徴があるものの、寸法の違いのほかには特に区別の術がないため、有効な分類かどうか疑問が抱かれる。これはすでに述べたとおり、甕型土器分類の欠如に由来する。また、ほかの近辺の洞窟遺跡においても確認されているように [Ishihara in press]、古典期後期の遺物群で大型甕と大型浅鉢が圧倒的に大半を占めている。これは古典期後期にはあらゆる洞窟で同様な活動が行われていたのではないかと推測できる。この大型浅鉢の型式名は、マウント・マロニー・ブラック (Mount Maloney Black) 型式といい、黒色の単彩文土器である。この型式の土器が、口唇部の形態によって、古典期後期I期(紀元600年-700年)・II期(紀元700年-800年)及び終末期(紀元800年-900年)に細分された研究が近くのシュナントゥニッチ遺跡でなされた [LeCount 1996: 146-147, 150]。この分類によれば、チェチェム・ハ洞窟遺跡より表採されたマウント・マロニー・ブラック型式の浅鉢は古典期後期II期のものといえる。

そのほか、古典期終末期に該当する型式を持つ香炉がステラの大部屋にあったということが以前の踏査で記されているが [Awe et al. n.d.]、1999年の調査時にはなかった。地主によれば、同一型式的土器片20片ばかり（これを本調査は記録）をその大部屋で拾って取り出したという。しかし、恐らく1固体だったはずの香炉が、なぜか1999年の時点では少なくとも数固体分の香炉片に増えており、接合して復元できるものはなかった。従って、本調査で記録された地主が拾ったという20片ばかりの香炉片は果たしてチェチェム・ハ洞窟遺跡より採集されたものかは分からない。

こういった土器の分布を安易に解釈することは危険であり、遺跡の形成過程を考慮する必要があ

時期	出土地点	甕型	椀型	浅鉢	筒型	大皿	小皿	不明
<b>ジェニー・クリーク土器文化圏</b>								
入口の大部屋		4						
小部屋 III		1						
石棚 VIII		1						
大部屋 III		1						
高架通路 III		1						
<b>パートン・クリーク/マウント・ホープ土器文化圏</b>								
入口の大部屋	2	2						1
高架通路 I		1						
石棚 VIII		1						
狹通路 III		2						
<b>フローラル・パーク土器文化圏</b>								
入口の大部屋		2						
主要通路 I	7	1						
石棚 I	1							
石棚 IV		1						
石棚 V	1							
石棚 X	33	1						
小部屋 II	1							
小部屋 III	1							
狹通路 III		1						
高架通路 II	1							
高架通路 III	2							
<b>ハーミティージ土器文化圏</b>								
入口の大部屋	1	1						
高架通路 I		1						
小部屋 III	3							
石棚 V	1							
石棚 VII	2							
石棚 X	14							
石棚 XI	2							
中央の大部屋	17		1					
主要通路 I		5						
狹通路 III		2						
高架通路 II		1						
高架通路 III		1						
<b>タイガー・ラン土器文化圏</b>								
入口の通路	2							
入口の大部屋	1	2						
小部屋 V	1							
小部屋 VI		1						
石棚 V		2						
石棚 VII	3	1						

石棚 X	5	1						
石棚 XI	2							
大部屋 III	1							
主要通路 I	5	1						
主要通路 II		1						
高架通路 II	2							
高架通路 III	2							
狹通路 III	4							
<b>スパニッシュ・ルックアウト土器文化圏</b>								
入口の通路	2	1						
入口の大部屋	1	3						
高架通路 I	17	4	4					
小部屋 III	6		3	1				
小部屋 V	1	1						
小部屋 VI	2							
石棚 I	4							
石棚 II	1							
石棚 VI	3	1	2					
石棚 VII	10	2	3					
石棚 VIII			3					
石棚 IX	2	2	1	1				
石棚 X	12		2					
石棚 XI	1							
中央の大部屋	8		7					
主要通路 I	5	1	1					
主要通路 II	16	6	10					
大部屋 III			3					
狹通路 III	3	3			1		1	
高架通路 III	2							

表1 時期毎にまとめた型式分類の結果

る。先古典期に比定する土器の分布を素直に受け止めて、先古典期には主に入口の大部屋を中心とした入口に近い空間を使用したと読み取るか。それとも後の時期に使用した時に、先祖の形見として奉納などして古い時期の土器片を残していくのか。もしくは清掃行為などによって古いものが片付けられ、本調査で表採された先古典期や古典期前期のものはたまたま清掃行為を逃れ今まで残されたのか。さまざまな場合が考えられるが、この問題については今後の課題としたい。

以下、チエチェム・ハ洞窟遺跡でみつかった土器に関して、特筆すべきことが2点ある。いずれも

洞窟内の活動内容を明らかにするひとつの手掛かりとなりうる。

本遺跡でみつかった土器の多くにすすが付着していた。土器の外面にすすが付着しているものに関しては、土器を火にかけたことがうかがえるが、それは洞窟の中で火にかけたのか、洞窟に持ち込む以前に、例えば住居にて使用していたのかを特定することはできない。しかし、完形品である土器や土器片の内面にすすが付着しているものもみつかり、土器の中で火を起こしたり、土器片を火にかけたりしていたことが推測でき、非日用的な活動が行われていたことが考えられる。

内面のみにすすが付着しているものと内外両面にすすが付着しているものとがある。内面のみにすすが付着しているものの完形品1点を除いた全てが破片である(実数：33点、他1点は甕の完形品)。そのうちの75%は甕型土器の破片である(実数:26点)。両面にすすが付着しているもの（実数:31点）のうち6点は完形品（甕型5点、浅鉢1点）であり、残りの8割は土器片（甕型20点、椀型4点、器形不明1点）である。ここで顕著に見られるのは、内面にすすが付着しているものの大半が、甕の土器片だということである。

こうした土器片のいくつかには樹液のような残滓などが残っているものもある。ベリーズのペトログリフ (Petroglyph) 洞窟遺跡にて、土器片の内面に不完全に焚かれたコパールの塊が残っている例があり、土器片が香炉として再利用されたことがうかがえる [Reents-Budet and MacLeod 1997: 60]。また、キチェ族の民族誌によると、祈願する際に、真新しい甕を故意に割り、割りとられた土器片が香炉として使用されることがあるという [Tedlock 1992: 65]。従って、推測にすぎないが、チエチエム・ハ洞窟遺跡で土器片の内面にすすが付着している上、コパールのような残滓が残っているものは、民族誌の例のようにコパールなどの香が焚かれた可能性が考えられる。その他に、内面に炭化物が付着していない土器や土器片にもレジドゥが残っているものもあり、現在同プロジェクト調査員 Christopher Morehart により分析中である。

最後に特筆すべきことは、キル・ホール (killhole) が施された土器が多く見られたことである。特に完形の土器に、径2cmくらいの小さな穴から底部を割り抜いたようなものまで形態は様々であるが、キル・ホールが施された器形は甕が主体であった。一方で、椀などの口縁の一部が欠けていることもしばしばあり、これも土器を「殺す」一種であることが指摘されている [Reents-Budet and MacLeod 1997: 59]。そもそもキル・ホールというものは、開地遺跡の副葬品にしばしば見られるもので、土器の魂を放つ目的で孔が空けられたり、割られたりする。チエチエム・ハ洞窟遺跡の全土器を見ると、記録された2割以上 (359点中 完形品81点) が完形品であるが、そのうちの5割近く(実数：87点中41点キル・ホール有り) にキル・ホールが開けられていた（孔があるものと口縁が欠けているもの両者含む）。器形毎に見ると、甕の5割以上 (実数：53点中 30点) 、椀や浅鉢では3割強 (実数：34点中11点) にキル・ホールが開けられていた。

## 6-2. その他の遺物・遺構

マノの断片1点、石灰岩製のステラ [Awe et al. n.d.] ともいえる無文の石碑1点、六角柱の水晶 (4x0.4cm)1点のほかに、非常に良好な保存状態でトーチかと思われる木片(10x4cm)が発見された。植物遺存体も発見されており、どうもろこしの穂軸7点、赤い種子多数、その他には土器内面についているレジドゥが採集された。そして、入口の大部屋やステラの大部屋での発掘による出土品には、粘板岩片3点、石材不明（玄武岩か?）の礫1点、多数のチャート製の石核や剥片、フテ貝 多数、動

物骨多数がある。

マヤの洞窟遺跡にてしばしば見られる遺構で壁やテラス、漆喰の床など人工的な改造物や建築物が挙げられるが、チェチェム・ハ洞窟遺跡では、そういったものは最小限のものしかみられない。最奥のステラの大部屋に降りて行く通路の急斜面に、簡単な階段状の段が削られているようだ。また、入口の大部屋の床面に石灰岩の小石が敷き詰められていたが、自然に石が転がり込んでたまつたものなのか意図的に敷かれたものかは判断し難い。

## 7. 考察

### 7-1. 遺跡の比定

上でみてきたように、チェチェム・ハ洞窟遺跡の土器は、先古典期中期から古典期後期までの時期に比定される。時代毎に土器の分布をみると、先古典期のものは主に入口付近の地点にみつかり、古典期前期のものの多くは洞窟中央部に、古典期後期のものは洞窟のあらゆる地点にみつかっている。単純に解釈すれば、時代が下ると共に洞窟の奥の地点が使用されるようになるといえる [Awe 1998, Reents 1980: 267-269]。さらに、もし土器（片）数が洞窟内で行われた活動量と比例するとなれば、先古典期や古典期前期の洞窟利用は比較的少なかったと考えられ、後期にはその利用が本格化し多くなる。当然活動内容の変化もあっただろう。しかし、清掃行為やその他の遺跡形成過程が大きく関わってくるため、このように単純に結論を導くことは危険であり、今後洞窟遺跡の形成過程を理解した上で他の洞窟遺跡と比較しながら、そして、民族学資料を参照しながら考えていく必要がある。

### 7-2. 空間特性

石棚X一中央の大部屋地点は、土器数でいうともっとも多く、遺物が一地点に高密度にみつかっている。さらに、古典期前期特有の多彩文土器であるベーザル・フランジ・ポリクロームの大半がこの地点でみつかっている。特に、石棚X一中央の大部屋地点は、ある一時期に集中的に使用されていた可能性があるが、その理由として以下のことが考えられる。(1)洞窟全体をみたときに、この地点はちょうど洞窟の中心部にあたる。(2)中央の大部屋には、この洞窟で唯一の大型鍾乳石（写真4）がある。(3)石棚Xでは地下水が天井に並ぶ小型の鍾乳石から垂れ、この洞窟では他にほとんどみられない現象である。洞窟内で得られる水は、あらゆるものの中である大地の中からとれた水であるため、神聖且つ純粋な水 (*zuhuy ha*) ということで価値がある。(4)中央の大部屋壁面の割れ目に水晶（写真5）がはめられている。(5)石棚Xは中央の大部屋の床面より高さ7m近くあり、チェチェム・ハ洞窟でもっとも高い棚である。棚に登ることは困難であるがそれにも関わらず遺物が集中している背景に何らかの意義があると考える。

以上の事実をふまえ、次のような解釈を提案したい。石棚X一中央の大部屋地点にはマヤの世界観を象徴する「世界」が小規模に再現されていると考えられる（図5）。確かに、上記の事実で(4)以外は作為的な施工ではないが、これらの偶然が重なり合った要素を、マヤの人たちが自分らの世界観をもとに統合させ、なにか意義のあるものを作りあげたのである。これについては以下に説明するアシュモアによるモデル [Ashmore 1991] を基盤にして考えてみたい。

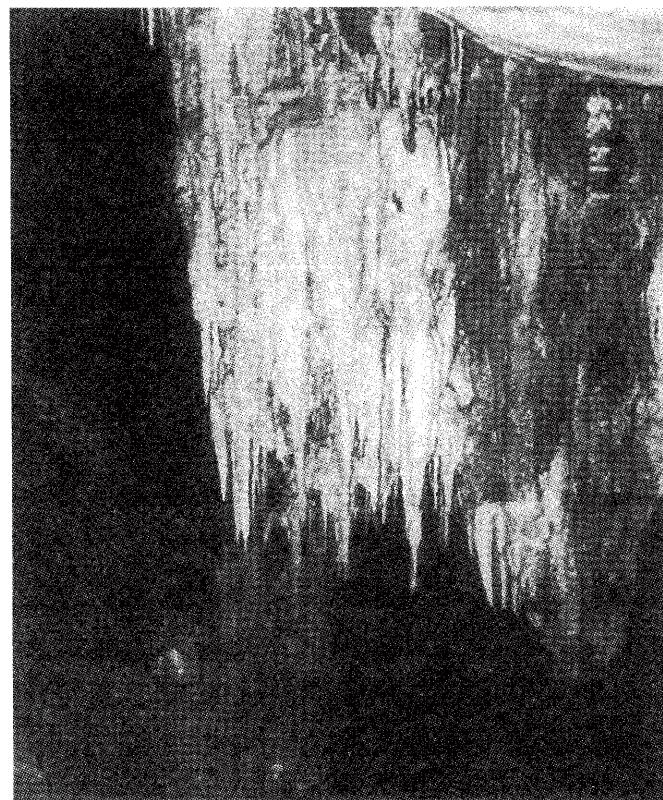


写真4 中央の大部屋にある大型鍾乳石（長さ約5m）

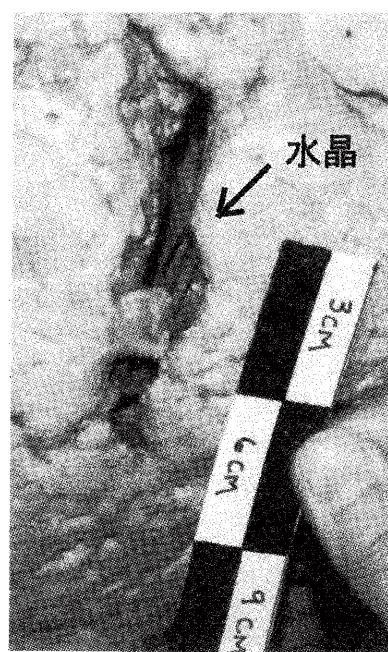


写真5 中央の大部屋の壁面の割れ目にはめられていた水晶

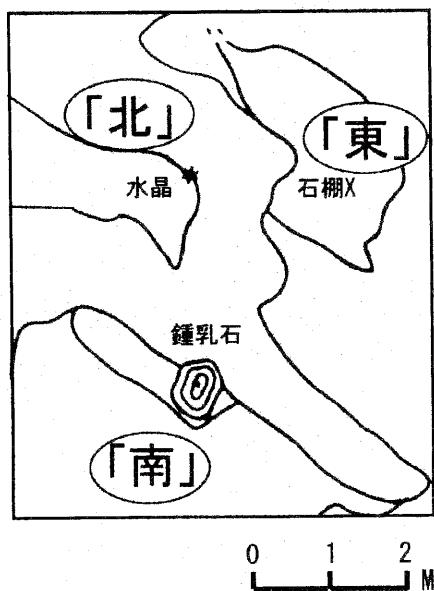


図5 マヤの世界観を象徴する「世界」を再現した空間

アシュモア [Ashmore 1991] は、グアテマラのティカル (Tikal) 遺跡での都市設計や空間利用を例に、コパン (Copán) 遺跡における建造物の配置に表現されるマヤの世界観について検討している。ティカル遺跡に複数あるツイン・ピラミッド建物群 (Twin Pyramid Complexes) のいずれも、プラザの南側に9つの扉をもつ建造物があり、地下界と関連付けられる「9」という数字が象徴されている。この場合、南が地下界を指し、天空・大地・地下界といった縦軸の3層のうち、地下界が「下」の方向であるとすると、プラザの北側にある石碑に彫刻されている王は「上」つまり天空と結び付けられ、王が祖先の超自然的存在と同等な位置におかれる [Ashmore 1991: 201]。他に、ティカルのグレート・プラザ (Great Plaza area) においても、ティカル遺跡全体を見たときのヤシュ・キン・カアン・チャク王 (Ruler B又はYax Kin Caan Chac) によって建立された建造物の配置においても、同様なパターンが見られる [Ashmore 1991: 202-203]。中心に球技場があるグレート・プラザでは、神殿I・IIが東西にあり、南側には9つの扉をもつ建造物5D-120が、そして北側に複数の王墓やステラが建ち並ぶノース・アクロポリス (North Acropolis) がある。遺跡全体に視野を広げた場合、神殿VIとIVが東と西にあり、ツイン・ピラミッド建物群3D-2が北にある。この場合、第一にツイン・ピラミッド建物群の北部に支配者が位置し、さらにはこの建物群自体が遺跡全体の北部にあると考えると、支配者が二重に北の方角に、つまりは王権の正統化に役立つ天空に二重に置かれている。

このような空間利用のモデルがマヤの世界観を表しているひとつのテンプレートとすると、洞窟遺跡内での空間利用においても同様なことがいえるのではないだろうか。以下にチエチェム・ハ洞窟の場合を考えてみる。

上記に述べた複数の要素を持ち備えた空間石棚 X—中央の大部屋をこのテンプレートに当てはめてみたい。まず、この洞窟で唯一の大型鍾乳石がこの地点にあるが、鍾乳石は洞窟特有のものであり、また、洞窟は地下界の入口とされているので、アシュモアが示したように地下界が「下」や

「南」を象徴するのであれば、この鍾乳石はこの空間の中で象徴的に「南」を指すといえる。

次に、壁面の割れ目にはめられている水晶だが、マヤの多くの民族誌 [c.f., Perrin 1996, Furst 1970: 392-398]において、水晶は人間の魂が物質化されたものとされている [Brady and Prufer 1999: 132]。水晶は死者の魂と深く関係し、死者はしばしば祖先と同等であるとみなされるため、チエチェム・ハ洞窟における水晶は死者の魂や天空にいる超自然的存在である祖先即ち「上」や「北」を象徴するといえよう。

すると、実際の方角とは別に相対的な方向性を考えると、鍾乳石が「南」を、水晶が「北」を象徴するとすれば、石棚Xは「東」の方角を占めることになる。「東」という方角はマヤのみならずメソアメリカにおいて祭祀的機能を果たす建造物が配置されていることなどに見られるように宗教的に重要な方角である [Thompson 1970: 196]。従って、「東」を占める石棚Xにも祭祀的意味合いが込められて使用されていたことが考えられる。

確かに、「北」「南」「東」と明瞭に方角が表されていないが、古代マヤ人は洞窟の中心に位置する鍾乳石や洞窟内に持ち込まれた水晶、石棚Xの特徴（遺物の多さ、水が垂れること、最も高い棚ということ）といった要素を作為的に統合し、この石棚X—中央の大部屋にマヤの世界観に基づいたミクロコスモス（祭祀的小宇宙microcosms）を作り出したことがうかがえる。勿論、これは一提案に過ぎず考古学的論証は難しいが、空間利用に見られるシンボリズムを主眼とした研究は前例が少ないため、今後の研究成果に期待するほかない。よって、この時点では、柔軟性のある視野を保つことが重要であり、例えば中央の大部屋の大型鍾乳石が、世界の中心に位置し世界の背骨ともいえる聖なるセイバの木を象徴している可能性についても考えてゆく必要があるだろう [Karl Taube 2000 personal communication]。

### 7-3. 洞窟内の活動について

次に、遺物の分析をふまえて、チエチェム・ハ洞窟遺跡内での古代マヤ人の活動内容について検討してみたい。

初めに、チエチェム・ハ洞窟は、巡礼地になるような大規模な洞窟とは異なって比較的小規模な洞窟である。また、チエチェム・ハ洞窟付近に開地遺跡は確認されておらず、Bradyが主張しているように直接センターの都市設計に組み込まれた [Brady 1997] というようなことはなさそうである。従って、センターの管轄からは少し外れたところにあるため、チエチェム・ハ洞窟は特に政治的権威のない者が、直接センターの行政とは関係しない儀礼などの活動を行っていたであろうことが推測できる。

さらに、洞窟の利用者に関しては、土器のみからでは階層性ははっきりしないが、上流階級の一指標とされている多彩文土器が35点近くみつかっており、また、都市遺跡ではエリート階層と関連づけられるステラのような石碑がチエチェム・ハ洞窟遺跡内にたてられている。よって、上流階級の人と何らかの関わりを持っていた人たちが洞窟を利用していたのではないかと推測できる。しかし、上流階級を示唆し外来品とされている多彩文筒型土器で人物などが描かれているもの [LeCount 1999: 249] はチエチェム・ハ洞窟では3、4点しか確認されておらず、その他に上流階級を示唆するとされるこの地域特有の土器で火山灰を混和材とするもの（ashware）[LeCount 1999: 248] もチエチェム・ハ洞窟にはほとんどない。ただし、ホンジュラスのコパン遺跡の洞窟（Gordon's Cave #3）で

は、多彩文土器は全く出土しておらず、エリート層ではない人たちの使用が推測されており [Brady 1995: 34]、また、ベリーズ西部にある5kmほどにおよぶ大規模な洞窟遺跡（Actun Tunichil Muknal）では多彩文土器は出土しているものの、より小規模なチエチェム・ハ洞窟の方が多彩文土器の出土数が多いことを考慮すると、チエチェム・ハ洞窟では、外来品、多彩文土器などが見つかっていることから、特にエリート層ではないものの上流階級の人たち、もしくは上流階級と密接な関係をもっている人たちが使用していたことが推測できる [Awe 2000 personal communication; LeCount 1999: 253]。しかし、単純に多彩文土器全般が上層階級を示唆するとも言い切れず、これに関してはさらなる研究が必要とされる。

一方で、洞窟内の活動内容に関する限り、チエチェム・ハ洞窟遺跡の遺物のほとんどが土器であり、人骨・放血の際に用いられる黒曜石の石刃やエイのトゲなどはみつかっておらず、人骨も本遺跡では全くみつかっていないため、他の洞窟遺跡では行われた可能性のある放血や生け贋はチエチェム・ハ洞窟遺跡では行われなかつたと推測できる。

また、入口の大部屋、中央の大部屋、石棚Xを除けば、全体的に洞窟内の垂れ水はほとんど見られず鍾乳石や石筍がほとんど形成されていないことから、古代の頃も今と変わらずほとんど垂れ水はなかったと考えられるため、洞窟利用者は、地下水を溜めに来ることが最大の目的ではなかつたことが推測できる。従って、Thompson[1975]によって提案されて以来、洞窟の用途としてすぐ連想されてしまう傾向にある「純粋な水」(zuhuy ha)の獲得が主要目的ではなかつたといえる。

上で述べたように、チエチェム・ハ洞窟はセンターと隣接しておらず、地方にあるといえるが、もし巡礼地でもなく行政に関わる洞窟でもなければ、収穫に関係する儀礼が行われたのではないだろうか。チエチェム・ハ洞窟では小さなもうろこしの穂軸が7点発見されていることから、Reents-BudetやMacLeod [1997: 94-95] が述べているように、雨乞いや感謝祭、収穫祭の際に行われる儀礼 [Redfield and Villa Rojas 1962[1934]: 134-144] など、農耕に関わる儀礼が行われた可能性がある。グアテマラのナハ・トゥニチ (NaTunich) 洞窟遺跡やコパンのゴードン (Gordon) 洞窟遺跡でも同様にもうろこしが発見されており、その年最初に収穫された実を奉納するという風習があったことが想起される [Brady 1999: 15]。

最後に、大型の甕の完形品が大量に並ぶ様子を見て、洞窟の中で食べ物の貯蔵が利用目的だったと思う者が多いが、チエチェム・ハ洞窟内は多湿(湿度約90%)であるため食物の貯蔵には適さない。しかし、涼しく比較的低い気温(約20°C)が一定に維持され、光も入らず、空気の循環が悪いなどといった環境は、アルコール飲料の発酵に適した条件が揃っているということが指摘されており [Brady 2000 personal communication]、マヤの祭祀の場で飲用されるバルチエなどのアルコール飲料の貯蔵が利用目的のひとつであった可能性がある [Dahlin and Litzinger 1986: 730, Ishihara 2001]。

## 8. 古代マヤにおける洞窟利用の解明に向けて

チエチェム・ハ洞窟遺跡に関しては、土器以外の遺物の検討、動植物遺存体の分析結果、炭化物の分析結果を合わせて総合的な検討が必要である。しかし、チエチェム・ハ洞窟遺跡はメソアメリカに無数にある洞窟遺跡のうちのたった一例であり、洞窟がマヤ文化の中でどのように位置付けられているかを追究するには、ある地域においてより多くの洞窟遺跡を調査し、これらを総合的に検

討する必要がある。

洞窟といつても、奥行き何キロメートルもあるものから10メートルしかない岩陰のようなもの、一度に入る人数が限定されてしまうような狭い通路が多いものから大人数が出入りできるもの、地下水が小川になって洞窟の中を流れているものから垂れ水が見られるもの、全く水が得られない洞窟などとあらゆる形態のものがある。こういった洞窟形態の相違と、報告されている遺物や遺構の種類が洞窟遺跡によって異なるという点を合わせると、洞窟利用者や利用目的、活動内容が洞窟によって、あるいは洞窟内の地点によって区別されていたことがうかがえる。

最後に、洞窟遺跡における土器研究に関しては当面、未だ乏しい洞窟遺跡出土土器のデータベースの拡大に努めることが要される。さらに、今までほとんど研究の主体にされてこなかった甕の検討、その方法論を開拓することも必要である。今後は、洞窟遺跡における遺物の組成、洞窟の形態、開地遺跡との位置関係等あらゆる点を考慮した上で、ほかの洞窟遺跡から出土された土器との比較研究を行っていくことが重要になってくる。多彩文土器の図像に焦点を合わせることもひとつの鍵となるであろう。当然ベリーズ西部のこの地域のみならず、いずれマヤ地域全般に視野を拡大することも要され、地域間の比較研究も今後の課題として生じてこよう。洞窟遺跡間の比較研究、洞窟遺跡と開地遺跡の比較研究や相互の関連性の検討及び、民族学的資料や図像学的資料における洞窟にまつわる様々な情報を統合し、当時洞窟で行われた儀礼活動を明らかにする手掛かりを追究するとともに、洞窟がマヤ人たちの生活の中でどういった役割を果たしていたのかを考えていきたい。そして、これらの研究を通して、古代マヤのイデオロギーの解明に貢献することを最終的な目標として提示することで、稿を終えたい。

#### 【謝辞】

本稿は2000年5月に国立民族学博物館でおこなわれた古代アメリカ研究会第5回総会において発表した内容を骨子とし、大幅に加除筆修正を行ったものである。筆者の拙い発表にも関わらず出席者から多くの御教示を頂き、深く感謝致します。また、チェチェム・ハ洞窟遺跡の調査をはじめ、卒業論文及び本稿をまとめるにあたり、次の諸機関、方々に多くの御教示、御指導を賜った。文末ではありますが、御芳名を記して厚く御礼申し上げます。

Department of Archaeology, Belize、University of New Hampshire、Jaime Awe、James Brady、常木晃、Karl Taube、Karen Bassie、BVAR/WBRCP staff & field school students of 1998/1999、Cameron Griffith、Christophe Helmke、Holley Moyes、青山和夫、川口武彦、桃崎祐輔、Antonio & Leah Morales and William Plytez、杓谷茂樹（順不同、敬称略）

#### 参考文献

Andrews, E. Wyllis IV

- 1965 *Explorations in the Gruta de Chac.* Middle American Research Institute Publication 31: 1-21, New Orleans.
- 1970 *Balankanche, Throne of the Tiger Priest.* Middle American Research Institute Publication 32, New Orleans.

Ashmore, Wendy

- 1991 Site-planning principles and concepts of directionality among the ancient Maya. *Latin American Antiquity* 2(3): 199-226.

Awe, Jaime J.

- 1998 The Western Belize Regional Cave Project: Objectives, Context, and Problem Orientation. In *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 1997 Field Season*, edited by Jaime J. Awe, pp. 1-21. Department of Anthropology Occasional Paper No.1. University of New Hampshire, Durham.
- 1999 The Distribution of Caves and Surface Sites in the Roaring Creek Valley, Belize: Implication for Sacred Geography. Paper presented at the 64th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, Chicago.

Awe, Jaime J., ed.

- 1998 *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 1997 Field Season*, edited by Jaime J. Awe. Department of Anthropology Occasional Paper No.1. University of New Hampshire, Durham.
- In press. a *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 1998 Field Season*, edited by Jaime J. Awe.
- In press. b *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 2000 Field Season*, edited by Jaime J. Awe.

Awe, Jaime J., Cameron S. Griffith, and Sherry A. Gibbs

- n.d. Stelae and Megalithic Monuments in the Caves of Western Belize. In *The Underground Maya*, edited by David M. Pendergast and Andrea Stone.

Awe, Jaime J. and David Lee, eds.

- In press. *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 1999 Field Season*, edited by Jaime J. Awe and David Lee.

Benson, Elizabeth P.

- 1985 Architecture as Metaphor. In *Fifth Palenque Round Table, 1983*, edited by Merle Greene Robertson and Virginia M. Fields, pp. 183-188. Pre-Columbian Art Research Institute, San Francisco.

Brady, James E.

- 1989 An Investigation of Maya Ritual Cave Use with Special Reference to Naj Tunich, Petén, Guatemala. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- 1995 A Reassessment of the Chronology and Function of Gordon's Cave #3, Copán, Honduras. *Ancient Mesoamerica* 6: 29-38.
- 1997 Settlement Configuration and Cosmology: The Role of Caves at Dos Pilas. *American Anthropologist* 99 (3): 602-618.
- 2000 Uncovering the Dark Secrets of the Maya—The Archeology of Maya Caves. In *Maya: Divine Kings of the Rain Forest*, edited by Nikolai Grube. K\_nemann, Köln. pp. 296-307.

Brady, James E. and Wendy Ashmore

- 1999 Mountains, Caves, Water: Ideational Landscapes of the Ancient Maya. In *Archaeologies of*

- Landscapes: Contemporary Perspectives*, edited by Wendy Ashmore and A. Bernard Knapp, pp. 124-145. Blackwell Publishers, Oxford.
- Brady, James E., Joseph W. Ball, Ronald L. Bishop, Duncan C. Pring, Norman Hammond, and Rupert A. Housley
- 1998 The Lowland Maya “Protoclassic”: A Reconsideration of its Nature and Significance. *Ancient Mesoamerica* 9: 17-38.
- Brady, James E. and Keith M. Prufer
- 1999 Caves and Crystalmancy: Evidence for the Use of Crystals in Ancient Maya Religion. *Journal of Anthropological Research* 55: 129-144.
- Brady, James E. and George Veni
- 1992 Man-made and Pseudo-karst Caves: The Implications of Sub-surface Geologic Features Within Maya Centers. *Geoarchaeology* 7(2): 149-167.
- Carlson, John B.
- 1981 A Geomantic Model for the Interpretation of Mesoamerican Sites: An Essay in Cross-Cultural Comparison. In *Mesoamerican Sites and World-Views*, ed. Elizabeth P. Benson, pp. 143-211, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Christenson, Allen J.
- 2001 In the Mouth of the Jaguar: Caves and Maya Cofradía Worship in Highland Guatemala. *Pre-Columbian Art Research Institute Journal* II(2): 1-9.
- Cook, Garrett W.
- 2000 *Renewing the Maya World: Expressive Culture in a Highland Town*. University of Texas Press.
- Dahlin, Bruce H. and William J. Litzinger
- 1986 Old Bottle, New Wine: The Function of Chultuns in the Maya Lowlands. *American Antiquity* 51(4): 721-736.
- Eliade, Mircea
- 1958 *Patterns in Comparative Religion*. Sheed and Ward, New York.
- 1959 *The Sacred and the Profane*. Harcourt Brace, New York.
- 1969 *Images and Symbols: Studies in Religious Symbols*. Sheed and Ward: New York.
- 1979 *Tratado de Historia de las Religiones*. Biblioteca Era, México.
- Eliade, Mircea, ed.
- 1987 *Encyclopedia of Religion*, vol..3: 127-133. Macmillan Publishing Company, New York.
- Freidel, David, Linda Schele, and Joy Parker
- 1993 *Maya Cosmos: three thousand years on the shaman's path*. William Morrow and Company, New York.
- Furst, P.
- 1970 A Possible Symbolic Manifestation of Funerary Endo Cannibalism. In *Proceedings of the Thirty-eighth International Congress of Americanists, Stuttgart-Munich, 1968*, edited by K. Renner, vol. 2, pp. 385-399.

- Gifford, James C.
- 1976 *Prehistoric Pottery Analysis and the Ceramics of Barton Ramie in the Belize Valley*. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Vol. 18. Harvard University, Cambridge.
- Gordon, George Byron
- 1898 *Caverns of Copan, Honduras*. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Memoirs 1: 137-148.
- Grove, David C.
- 1973 Olmec Altars and Myth. *Archaeology* 26 (2): 128-135.
- Heyden, Doris
- 1975 An Interpretation of the Cave Underneath the Pyramid of the Sun in Teotihuacan, Mexico. *American Antiquity* 40: 131-147.
- 1981 Caves, Gods and Myths: World-view and Planning in Teotihuacan. In *Mesoamerican Sites and World Views*, edited by Elizabeth P. Benson. Dumbarton Oaks, Washington, D.C.
- 1987 Caves. In *Encyclopedia of Religion*, edited by Mircea Eliade, vol. 3: 127-133. Macmillan Publishing Company, New York.
- Houston, Stephen D. and Karl A. Taube
- 1989 Folk Classification of Classic Maya Pottery. *American Anthropologist* 91: 720-726.
- Ishihara, Reiko
- 2000 Ceramics from the Darkness: An Investigation of the Ancient Maya Ritual Cave Activity at Actun Chechem Ha, Cayo District, Belize. B.A. thesis, University of Tsukuba, Tsukuba, Japan.
- 2001 Light on the Ceramics from Below: An Investigation of Maya Cave Use through Pottery. Paper presented at the 66th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, New Orleans, LA, April 22, 2001.
- In press. Reconnaissance to Actun Uchhentzub (Flour Camp Cave), Cayo District, Belize. In *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 2000 Field Season*, edited by Jaime J. Awe.
- Ishihara, Reiko, Jaime J. Awe, and Christophe Helmke
- In press. Pots from Below: A Preliminary Examination of the Ceramics from Actun Chechem Ha, Belize. In *The Western Belize Regional Cave Project: A Report of the 1999 Field Season*, edited by Jaime J. Awe and David Lee.
- Ishihara, Reiko and Cameron Griffith
- n.d. Archaeological Investigations at Actun Chechem Ha, Cayo District, Belize.
- Joyce, Thomas A.
- 1929 Report on the British Museum Expedition to British Honduras, 1929. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 59: 439-459.
- LeCount, Lisa J.
- 1996 Pottery and Power: Feasting, Gifting, and Displaying Wealth Among the Late and Terminal Classic Lowland Maya. Ph.D. dissertation. University of California, Los Angeles.
- 1999 Polychrome Pottery and Political Strategies in Late and Terminal Classic Lowland Maya Society.

*Latin American Antiquity* 10 (3): 239-258.

Manzanilla, Linda

- 2000 The Construction of the Underworld of the Underworld in Central Mexico. In *Mesoamerica's Classic Heritage: From Teotihuacan to the Aztecs*, edited by David Carrasco, Lindsay Jones, and Scott Sessions, pp. 87-116. University Press of Colorado, Boulder.

McAnany, Patricia ed.

- 1997 *Caves and Settlements of the Sibun River Valley, Belize: 1997 Archaeological Survey and Excavation*. Department of Archaeology, Boston University.

Mercer, Henry C.

- 1897 Cave Hunting in Yucatan. *Technology Quarterly* 10:353-371. MIT, Boston.

Miller, Mary and Karl Taube

- 1993 *The Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thanes and Hudson, New York.

Pendergast, David

- 1969 *The Prehistory of Actun Balam, British Honduras*. Art and Archaeology Occasional Paper No.16. Royal Ontario Museum, Toronto.

- 1970 *A.H. Anderson's Excavations at Rio Frio Cave E, British Honduras (Belize)*. Art and Archaeology Occasional Paper No.20. Royal Ontario Museum, Toronto.

- 1971 *Excavations at Eduardo Quiroz Cave, British Honduras (Belize)*. Art and Archaeology Occasional Paper No.21. Royal Ontario Museum, Toronto.

- 1974 *Excavations at Actun Polbilche, Belize*. Royal Ontario Museum Monograph 1, Toronto.

Perrin, M.

- 1996 The Urukáme: A Crystallization of the Soul, pp. 403-428, in *People of the Peyote: Huichol Indian History, Religion, and Survival*, ed. S.B. Schaefer and P.T. Furst, University of New Mexico, Albuquerque.

Redfield, Robert and Alfonso Villa Rojas

- 1962[1934] *Chan Kom: A Maya Village*. University of Chicago Press, Chicago.

Reents, Doris Jane

- 1980 The Prehistoric Pottery from Petroglyph Cave, Caves Branch Valley, El Cayo District, Belize, Central America. M.A. dissertation. University of Texas, Austin.

Reents-Budet, Doris and Barbara MacLeod

- 1997 The Archaeology of Petroglyph Cave, Cayo District, Belize. Unpublished manuscript.

Sabloff, Jeremy A.

- 1975 *Excavations at Seibal, Department of Peten, Guatemala*. Part 2: Ceramics. Memoirs of the Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Vol.13. Harvard University, Cambridge.

Schele, Linda and Mary Miller

- 1986 *The Blood of Kings: Dynasty and Ritual in Maya Art*. George Braziller, Inc., New York.

Smith, Robert

- 1952 *Pottery at Mayapan*. Carnegie Institution of Washington Year Book 51: 251-256.

- 1953 *Pottery at Maya and Vicinity*. Carnegie Institution of Washington Year Book 52: 279-282.
- 1954 Cenote Exploration at Mayapan and Telchaquillo. Department of Archaeology, *Current Report* 12: 222-233. Carnegie Institution of Washington, Washington, D.C.
- 1955 Ceramic Sequence at Uaxactun, Guatemala. 2 Vols. Middle American Research Institute, Pub. 20. Tulane University, New Orleans.
- 1971 *The Pottery of Mayapan: Including Studies of Ceramic Material from Uxmal, Kabah, and Chichen Itza*. Papers of Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Vol. 66. Cambridge.
- Strómsvik, Gustav
- 1956 Exploration of the Cave of Dzab-Na, Tecoh, Yucatan. Department of Archaeology, *Current Reports* 35: 463-470. Carnegie Institution of Washington, Washington, D. C.
- Taube, Karl
- 1986 The Teotihuacan Cave of Origin: The Iconography and Architecture of Emergence Mythology in Mesoamerica and the American Southwest. *RES: Anthropology and Aesthetics* 12: 51-82.
- Tedlock, Barbara
- 1992 *Time and the Highland Maya*. Revised edition. University of New Mexico Press, Albuquerque.
- Tedlock, Dennis
- 1996 *Popol Vuh: the Maya Book of the Dawn of Life*. Revised edition. Simon and Schuster, Inc., New York.
- Thompson, Edward H.
- 1938 *The High Priest's Grave, Chichen Itza, Yucatan, Mexico*. Prepared for publication, with notes and introduction by J. Eric Thompson. Field Museum of Natural History, Anthropology Series 27, No. 1.
- Thompson, J. Eric
- 1970 *Maya History and Religion*. University of Oklahoma Press, Norman.
- 1975 Introduction to the Reprint Edition. In *The Hill-Caves of Yucatan*, by Henry C. Mercer. University of Oklahoma Press, Norman.
- Tozzer, Alfred M.
- 1941 *Landa's Relación de las Cosas de Yucatan*. Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology 18. Cambridge.
- Vaillant, George C.
- 1927 The Chronological Significance of Maya Ceramics. MS doctoral dissertation, Harvard University, Cambridge.
- Vogt, Evon
- 1981 Some Aspects of the Sacred Geography of Highland Chiapas. In *Mesoamerican Sites and World Views*, edited by Elizabeth P. Benson, pp. 119-142. Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington, D.C.
- Williams, Nich
- 1992 *Below Belize 1991: The Report of the 1991 Expedition to the Little Quartz Ridge, Southern Belize*. Somerset, England.

